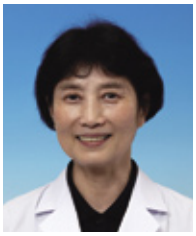
視覚人間と聴覚人間



田中幸子
大阪府立成人病センター

[略歴]
田中幸子（たなか さちこ）
現職:地方独立行政法人大阪府立病院機構
大阪府立成人病センター 検診部長
学歴:1965年3月:大阪府立大手前高等学校卒業
1971年3月:大阪大学医学部卒業
専門分野:肝胆膵がんの診療

私は“超音波大好き”を自認しています。

何故、超音波に惹かれるのか?好き嫌いの理由は後からこじつけることが多いのですが、とにかく思いつくことを書かせていただきます。

視覚人間と聴覚人間があるとよく言われます。私は全くもって視覚人間です。

若い時からひどい近視なのですが、微妙な色や模様の違いにはかなり敏感です。一方、聴力は全く正常なのですが、微妙な音色やリズムの違いを区別する能力は随分低いように思います。それを強く自覚したのは、医学部を卒業して循環器内科に入局した時です。

学生時代に心臓の開胸手術の見学で“拍動している心臓”を目の前に見て、これこそは“命の証”と感動し、循環器の医師になりたいと思いました。お裁縫は苦手だったので循環器内科を志望しました。ところが、まっさらのリットマンの聴診器で患者さんの心音を聴いても、弁膜症や先天異常がなかなか診断できず、自分には適性があるのかしらと少し不安でした。私の入局した大阪大学医学部第一内科の心臓グループには、当時、仁村泰治先生を中心に、松尾裕英先生、北畠顕先生や別府慎太郎先生をはじめ、錚々たる研究者が揃っておられ、超音波を用いた循環動態の研究をとても活発に行なっておられました。心臓の弁や壁の動きを、音（心音）や電気信号（心電図）としてではなく画像として視覚的に捉えることができるのは当時、画期的でとても魅力を感じました。これなら、聴覚に頼らなくてもと少し安心もしました。

その後、出産に合わせて半年余り休業した事などもあり、私は大阪府立成人病センターで新たに消化器内科医として癌の診療に携わることになりました。ここで、腹部の超音波医学のパイオニアのお一人である北村次男先生に師事させていただくことができ、超音波医学と再会しました。超音波という“音”を用いて“視覚情報”を得るという手法は腹部領域においてもやっぱり新鮮で魅力的でした。以来30年余りずっと、超音波診断法を用いた肝胆膵の悪性腫瘍の診療に関わっています。

この間、超音波医学は診断装置の機能の目覚しい進歩とともに著しい発展を遂げてきました。コンタクトコンパウンドから、電子スキャンでリアルタイム表示が可能となり、各種の穿刺手技も超音波ガイドで安全に行えるようになりました。また、コンベックスプローブにより腹部の観察での死角が随分と減りました。次いで、ドプラ現象を活用して深部臓器の血流も体表からカラー表示できるようになりました。“非線形”という何か神秘的にさえ感じていた領域の一部もコンピュータ技術の進歩でハーモニクスとして扱えるようになり、画質向上に役立てられました。さらには微小気泡による経静脈性造影検査も可能となりました。また、最近は硬さの表示やVolume Dataの収録も容易に行なえるようになってきています。

自然科学は何よりも虚心に観察することから始まると私は信じています。新しく開発された超音波の機能を活用して実際に患者さんの病変を観察すると、次々と新たな発見がありました。そのお陰で私は今までずっと楽しく仕事を続けてくることができました。新しい装置が来たから、もう一度病変を見せてねと言って、入院患者さんに夕方検査室に来ていただき長時間お付き合いをしてもらうこともよくありました。超音波検査は被検者に苦痛を与えることがないので、こんな時にも患者さんは嫌がるどころか、熱心に診てもらったと、とても感謝して下さいました。これも、超音波を専門にしていてとてもよかったことのひとつです。

エンジニアサイドの努力のお陰で次々と開発される新機能を臨床の場に応用させていただき、患者さんに侵襲を加えることなくより詳細な病態の把握や正確な診療情報を得ることができるという喜びを常に感じながらこれまでやってくることができました。私の今までの医者人生はまさに超音波とともにあったと言えます。

最後に、私が超音波大好きの理由に話をもどしますと、1番目には自分が視覚人間であること、2番目には超音波診断が患者さんに喜ばれる検査方法であること、3番目には超音波医学の分野で次々と新たな展開が開けてきたこと、そして最後に忘れてならないのは、超音波医学の魅力を私に示し導いて下さった恩師の先生にめぐり会えたことです。

人にも地球環境にもやさしい超音波医学の素晴らしさをもっと多くの人々に知っていただき活用していただきたいと願っています。そして、日本超音波医学会が、熱意あるMedicalとEngineringの研究者の共通の議論の場として今後もますます発展していくよう願っています。